

《李家山村で農家民宿に泊まる》

岩田温子

李家山村は山西省西端の、黄河の傍の小高い山の上の村です。黄河にそったバス道の村の入り口から、コーリャンやアワの畑、ナツメがたわわに実っている段々畑を通過して約30分、黄土の山道を高さ140m登ると、海拔800mにある村の民宿に到着です。村人の多くは、山の斜面に横穴を掘った窯洞（ヤオトン）といわれる家に、下から運びあげた石や木材で立派な門構えや塀をめぐるして住んでいます。山頂にあるだけあって、黄河の西側の陝西省の山もよく見えます。住民の殆どは李さん、だから李家山です。

李家山村にやってきた最初の晩は中秋節の前日でした。綺麗な円い月を眺めながら、気持のよい風の吹く庭で夕食をとっていると、一人、二人と村の人がやってきました。食事をしている私たちを、おじいさんたちは黙って座って眺めています。やがて、一人のおじいさんが民謡を一曲聞かせくれました。苦しい生活の中、愛する人を残して遠くへ働きに行かなければならない悲しさを唄ったものでした。味わいあるいい声で、拍手喝采。おじいさんは気を良くしてさらに一曲。すると別なおじいさんが「自分も」と歌いだし、最後は私たちも、同宿の中国人の客たちも、日本や中国の歌を歌い、賑やかな交歓会となりました。

翌朝、村を散歩していると昨夜の村人に会いました。挨拶をすると、そのまま家の中に招かれ、部屋を見せてくれ、梨を持たせてくれました。小さいけれど、おいしい梨でした。

この李家山村の存在は、インターネットで「山西省の観光」をキーワードに検索中、「紅棗（あかなつめ）の実る村」というサイトの中で知りました。このサイトは大野のり子さんという日本人女性が3年前から李家山とその周辺の村々に長期滞在をして、日本軍による戦争被害者を訪ね、聞き書きをし、載せているものです。大野さんがこの地にやってきた当



村から滔々と流れる黄河が見える 撮影：沖田辰夫

初は、日本人と知って、険しい表情で「帰れ！」と言う人もいましたが、彼女の真摯な姿勢と人柄から徐々に自らの体験や見聞きしたことを話してくれるようになりました。話終わると逆に「聞いてくれてありがとう」と言われたことも度々だそうです。

私はこのサイトを読んで、この地の人々の大きな心に深く感銘をうけました。言葉には言い尽くせない恨み、怒り、悲しみを心の中に抱えながらも笑顔で迎えてくれる人々の住んでいる村を訪ねたいと思うようになったのです。

山を下りる日、宿の奥さんは私に「初めの頃は日本人と嫌だったのよね。でも今は大丈夫。今度また是非来てね。」と言ってくれました。大野さんのようには出来ないにしても、笑顔で接してゆくことで日本人に対する新たな見方をしてもらえれば、是非また行きたいと思っています。

《黄土高原の旅・雑感》

佐藤勇治

【山西省・李家山の水】

黄河に面する小高い丘の頂に、この部落はある。丘には幾つかの亀裂が有り、深い谷を作っている。

この谷の奥には黄土と基盤の岩石層の隙間から僅かに滲み出す水が有り、この水が部落の人々の命を支えている。水は窪みに貯えられているが、我々が想像する泉とはまるでイメージが異なり貯水槽には青ミドロさえ揺れている。人々は毎朝この水を、天秤棒に下げたバケツに汲み、高低差30メートルあまりの急な崖道を登るのである。重さにして35キロほどあると言う。なんでこんな苦しい環境に住み付いたのかと勝手ながら思ってしまう。

栓を捻れば瞬時にお湯まで出て来る生活と如何に異なるものか。だからここでは水は貴重である。何回か使い回しされる。風呂は如何しているのかしらというのが、我々一行の疑問であった。乾燥に向かっている地球では何時かあの滲みだす水が止まってしまうことも懸念される。そんな時が来ないことを祈っている。

【ケイタイ】

李家山の農家の姿は、私には昭和20年代の日本の農家を思い出させるものだった。その光景の中で一つ面白く感じたものがある。

それは農家のオカミサンがケイタイを使っている光景

だった。アンチークと言えるような周囲とのギャップが面白かったのである。ケイタイは固定通信設備の段階を一気に飛び越して、僻地に電波通信の利点をもたらした。庭先で何処かの誰かと時を構わず会話を交わしている姿と周囲の生活設備との不一致には、アフリカのマサイ族が狩猟にケイタイを使っていることと通じる面白さがあった。

庭で棗を干しながらインターネットやケイタイを駆使して、資産の運用について、投資会社とやりとりする時も近いであろうと想像した。

なつめ 【棗】

棗栽培が生活の手段であろうが、それにしても大変な栽培面積と本数である。11月が収穫の季節と聞いたが、一体どうやって収果するのか。多分手で木をゆすり、実を拾い集めるのであろう。オリーブや銀杏は機械化されているが、此処では無理なような気がする。家族総出、或いは季節労働者の手を借りるのであろうが、いずれにしても重労働であろう。

ところで棗の木に棘があるのをご存知か。山の畠に案内されて、サア自由にお採りなさいと言われ、枝に手を差し入れた途端、プツリと指に刺さり、血が噴出した。これでは動物も易々とは盗み食い出来ぬであろう。日本に渡来した平安時代には奈都女と書いたそうだが、たおやかな名前にも似ずしたたかに防御されているとは。

「見下ろせば大河流るる黄土の地棗たわわに黍、粟熟るる」



棗が実る頃 李家村にて スケッチ：田井

【石炭】

山西省は石炭の産地である。それで日本では見られない光景に出会う。山西省の道路は何処へ行っても石炭トレーラーの列だ。制限重量50トンのトレーラーも20%増しまで黙認されているそうだから、60トン積みで地鳴りを上げて疾駆する。薄いアスファルト舗装など忽ち砕け散り、重いタイヤで深くえぐられた凸凹道となる。沿線は



私たち一行がお世話になった農家の屋敷 門構えも立派な四合院造りで、往時がしのばれる 撮影：沖田辰夫

家も木々も土埃りで厚く覆われる。

通過禁止の道路を持つ町や村では禁止を無視して進入する運搬車に対抗して、橋や道路に大きなコンクリート塊を置く。我々の乗ったバスがこのトバッチリを受けて橋を渡れず、急遽、村人に集まって貰いコンクリート塊を動かす破目となった。

当然の事ながら相応の出費となった。ツアーガイドや運転手には村民集めなど予想もしない仕事上積みされる。後であれが結構村の収入になっているのではないかといううがった感想も飛び交った次第。石炭の生み出す富は地元には還元されて居ない様だった。

「石炭の産地を誇る黄土の地大樹茂りし太古偲ばる」